

『正法眼蔵』「仏性」卷訳註（七）

角 田 泰 隆

凡例

一、本稿は、二〇二一年度における、駒澤大学大学院の角田ゼミ（宗学特講Ⅱ【演習】）で作成した資料を基に作成したものである。

二、【本文】は、本山版『正法眼蔵』（寛政十一年（一七九九）刊）を底本とし、左記の『正法眼蔵』諸本と校異して作成した。校異は本文下段に示したが、字体の違い（新字・旧字・異体字等）は、校異から除いた。諸写本によつて底本の本文を改めた部分もあるが、その場合は校異に記した。校異した諸本の略号は次の通りである。なお、これらの写本は全て『蒐書大成』に収録されている。

懷奘書写本…懷 正法眼蔵抄…抄 乾坤院所蔵本…乾 正法寺所蔵本…正 龍門寺所蔵本…龍
洞雲寺所蔵本…洞 瑠璃光寺所蔵本…瑠 長円寺所蔵本…長 玉雲寺所蔵本…玉 徳雲寺所蔵本…徳
永平寺所蔵嘉元二年（一三〇四）書写本…嘉

三、【本文】は便宜的に適宜分割し、最初に段落分けを示すため【本文】のみをまとめて掲げ、番号を付した。底本の片仮名は平仮名に改め（子↓ね、キ↓ぬ、エ↓ぬ）、内容解釈に基づいて独自の句読点とルビを付した。【本文】・【懷奘書写本】の漢字は原典の字体をそのまま用いたが、【本文】以外は、【本文】からの引用も含めて、原則として新字体に改めた。

四、【語註】は既刊の辞典等を参照して新たに作成したが、辞典等をそのまま引用したものについては典拠を明記した。【語註】・【解説】で『正法眼蔵』を引用する場合は、大久保道舟編『古本校訂正法眼蔵全』（筑摩書房、一九七一年四月）

より引用し、頁数のみ記した。但し、既刊の『正法眼蔵』「仏性」巻訳註「収録箇所は、当該号の略号と頁数で示した。引用文中の傍点・傍線は、全て筆者が付したものである。参照文献・辞典の略号は次の通りである。

『大正新脩大蔵経』…『大正蔵』 、『大日本統蔵経』…『正統蔵』

『景德伝燈録』(禅文化研究所、一九九〇年五月)…『禅文化本』

中村元編『仏教語大辞典』(東京書籍、一九八一年五月)…『中村仏教』

『新版禅学大辞典』第十刷(大修館書店、二〇二〇年四月)…『禅学』

入矢義高・古賀英彦編『禅語辞典』(思文閣出版、一九九一年七月)…『禅語』

『大漢和辞典』…『大漢和』 『漢辞海』第四版(三省堂、二〇一九年二月)…『漢辞海』

大久保道舟編『道元禅師全集』下巻(筑摩書房、一九七〇年五月)…『大久保本』

水野弥徳子校註 岩波文庫本『正法眼蔵』(岩波書店、一九九〇～一九九三年)…『岩波文庫本』

『道元禅師全集』(春秋社〈原典版〉、一九八八～一九九一年)…『春秋社本』

『道元禅師全集』(春秋社〈原文対照現代語訳版〉、一九九九～二〇〇三年)…『春秋社本〈現代語訳版』

河村孝道・角田泰隆編『山本版訂補正法眼蔵』(大本山永平寺、二〇一九年八月)…『山本版訂補』

『永平正法眼蔵蒐書大成』(大修館書店、一九七四～一九八二年、続輯一九八九～二〇〇〇年)…『蒐書大成』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(一)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十四号、二〇一六年三月…『仏性訳註(一)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(二)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十五号、二〇一七年三月…『仏性訳註(二)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(三)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十六号、二〇一八年三月…『仏性訳註(三)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(四)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十七号、二〇一九年三月…『仏性訳註(四)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(五)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十八号、二〇二〇年三月…『仏性訳註(五)』

角田泰隆『正法眼蔵』「仏性」巻訳註(六)『駒澤大学仏教学部研究紀要』七十九号、二〇二一年三月…『仏性訳註(六)』

なお「仏性訳註(一)」から「仏性訳註(六)」は、「駒澤大学学術機関リポジトリ」にてインターネット公開されている。

五、【直訳】は、できる限り本文に忠実に訳し、基本的に古文を現代語に訳すにとどめ、一部便宜的に漢字用語の現代語訳も行った。

六、【現代語訳】は、【直訳】に基づいて漢字用語の解説を加え、理解しやすくするために（～）内に本文にない言葉を補い、必要に応じて（ ）内に直前の語の解釈を付した。

七、【懷奘書写本に見られる書き改めについて】は、懷奘書写本の書き改めの前後でどのように内容が変化したかについて特に解説した。書き改めが少ない場合は、【解説】の中で簡単に言及する形とし、一切無い場合は略した。【懷奘書写本】掲載の理由については、「仏性訳註（二）」七七頁を参照されたい。

※当号では、【解説】において「龍樹身現円月相」段全体を取り上げるため、便宜上、「仏性訳註（五）」・「仏性訳註（六）」に掲載した当該段の全ての本文を掲げ、【解説】では該当箇所を「仏性訳註（五）」①②」等と指示した。

【本文】（「仏性訳註（五）」掲載分）

① 第十四祖龍樹尊者、梵ニ云フ那伽闍刺樹那ト。唐ニ云ヒ龍樹、亦タ龍勝ト、亦云ニ龍猛ト。西天竺國ノ人ナリ也。至ニ南天竺國ニ。彼ノ國之人、多ク信ニズ福業ヲ。尊者爲ニ説ニク妙法ヲ。聞ク者通ヒニ相謂テ曰ク、人ニ有ニルハ福業一、世間ノ第一ナリ。徒ニ言フ佛性ヲ、誰能觀レ之ヲ。尊者曰ク、汝欲バ見ニト佛性ヲ、先ツ須ク除ニ我慢一。彼ノ人ノ曰ク、佛性大カ耶小カ耶。尊者曰ク、佛性ハ非ズ大ニ非ズ小ニ、非ズ廣ニ非ズ狹ニ、無レク福無レシ報。不死不生ナリ。彼ノ聞ニテ勝一、悉ク迴ニ初心ヲ。尊者復タ於ニ座上ニ、現ニ自在身一。如ニ滿月輪ノ。一切衆會、唯ダ聞ニテ法音ノ、不レ觀ニ師ノ相一。

於ニ彼ノ衆中ニ、有ニ長者ノ子迦那提婆一、謂テ衆會ニ曰ク、識ニ此ノ相ヲ否ヤ。衆會曰ク、而今我等目所レ未ダ見、耳無レテ所レ聞ク、心無レテ所レ識、身無レテ所レ住スル。提婆曰ク、此レハ是レ尊者現ニ佛性ノ相ヲ、以テ示ニ我等ニ。何ヲ以テ知レレ之ヲ。蓋シ以テ三、無相ニ昧、形如ニクナルヲ滿月一。佛性ノ之義、廓然トシテ虚明ナリト。言ヒ訖レバ輪相即チ隱ル。復居ニ本座ニ、而説レキテ偈ヲ言ク、身現ニ圓月ノ相一、以テ表ス諸佛ノ體ヲ。説法無ク其形一、用辨非ズト聲色ニ。

② しるべし、眞箇の用辨は、聲色の即現にあらず。眞箇の説法は、無其形なり。尊者かつてひろく佛性を爲説する、不可數量なり。いまはしばらく一隅を略擧するなり。

汝欲見佛性、先須除我慢。この爲説の宗旨、すぐさず辨肯すべし。見はなきにあらず、その見これ除我慢なり。

我もひとつにあらざ、慢も多般なり。除法また萬差なるべし。しかあれども、これらみな見佛性なり、眼見目觀に
ならふべし。

佛性非大非小等の道取、よのつねの凡夫・二乗に例諸することなかれ。偏枯に佛性は廣大ならんとのみおもへる、
邪念をたくはへきたるなり。大にあらざ小にあらざらん正當愆磨時の道取に罣礙せられん道理、いま聽取するが
ごとく思量すべきなり。思量なる聽取を使得するがゆゑに。

しばらく尊者の道著する偈を聞取すべし。いはゆる、身現圓月相、以表諸佛體なり。すでに諸佛體を以表しき
たれる身現なるがゆゑに、圓月相なり。しかあれば、一切の長短方圓、この身現に學習すべし。身と現とに轉疎なるは、
圓月相にくらきのみにあらず、諸佛體にあらざるなり。愚者おもはく、尊者かりに化身を現せるを圓月相といふとお
もふは、佛道を相承せざる黨類の邪念なり。いづれのところのいづれのとしか、非身の佗現ならん。まさにしるべし、
このとき尊者は高座せるのみなり。身現の儀は、いまのたれ人も坐せるがごとくありしなり。この身これ圓月相現な
り。身現は方圓にあらず、有無にあらず、隱顯にあらず、八萬四千蘊にあらず、ただ身現なり。

③ 圓月相といふ、這裏是甚麼所在、說細說麤月なり。この身現は、先須除我慢なるがゆゑに、龍樹にあらず、
諸佛體なり。以表するがゆゑに諸佛體を透脱す。

しかあるがゆゑに、佛邊にかかはれず。佛性の滿月を形如する虛明ありとも、圓月相を排列するにあらず。い
はんや用辨も聲色にあらず、身現も色身にあらず、蘊處界にあらず。蘊處界に一似なりといへども以表なり、諸佛
體なり。これ說法蘊なり、それ無其形なり。無其形さらに無相三昧なるとき身現なり。一衆いま圓月相を望見すお
いへども、目所未見なるは、說法蘊の轉機なり、現自在身の非聲色なり。即隱即現は、輪相の進歩退歩なり。復於
座上現自在身の正當愆磨時は、一切衆會、唯聞法音するなり、不覩師相なるなり。

尊者の嫡嗣迦那提婆尊者、あきらかに滿月相を識此し、圓月相を識此し、身現を識此し、諸佛性を識此し、諸佛
體を識此せり。入室瀉餅の衆たとひおほしといへども、提婆と齊肩ならざるべし。提婆は半座の尊なり、衆會の導
師なり、全座の分座なり。正法眼蔵無上大法を正傳せること、靈山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし。龍
樹末廻心のさき、外道の法にありしときの弟子おほかりしかども、みな謝遣しきたれり。龍樹すでに佛祖となれり
しときは、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼蔵を正傳す。これ無上佛道の單傳なり。しかあるに、僭偽の

邪群、ままに自稱すらく、われらも龍樹大士の法嗣なり。論をつくり義をあつむる、おほく龍樹の手をかれり、龍樹の造にあらざ。むかしすてられし群徒の、人天を惑亂するなり。佛弟子はひとすちに、提婆の所傳にあらざらんは、龍樹の道にあらざとしるべきなり。これ正信得及なり。しかあるに、偽なりとしりながら稟受するものおほかり。誇大般若の衆生の愚蒙、あはれみかなしむべし。

【本文】（「仏性訳註」六）「掲載分」

① 迦那提婆尊者、ちなみに龍樹尊者の身現をさして、衆會につげていはく、此是尊者現佛性相、以示我等、何以知之、蓋以無相三昧、形如滿月、佛性之義、廓然虛明なり。

いま天上・人間、大千法界に流布せる佛法を見聞せる前後の皮袋、たれか道取せる、身現相は佛性なりと。大千界には、ただ提婆尊者のみ道取せるなり。餘者はただ、佛性は眼見・耳聞・心識等にあらざとのみ道取するなり。身現は佛性なりとしらざるゆゑに道取せざるなり。祖師の、をしむにあらざれども、眼耳ふさがれて見聞することあたはざるなり。身識いまだおこらずして、了別することあたはざるなり。無相三昧の形如滿月なるを望見し禮拜するに、目末所親なり。佛性之義、廓然虛明なり。

② しかあれば、身現の説佛性なる、虛明なり、廓然なり、說佛性の身現なる、以表諸佛體なり。いづれの一佛二佛か、この以表を佛體せざらん。佛體は身現なり、身現なる佛性あり。四大五蘊と道取し會取する佛量祖量も、かへりて身現の造次なり。すでに諸佛體といふ、蘊處界のかくのごとくなるなり。一切の功德、この功德なり。佛功德は、この身現を究盡し囊括するなり。一切無量無邊の功德の往來は、この身現の一造次なり。

しかあるに、龍樹・提婆師資よりのち、三國の諸方にある前代後代、ままに佛學する人物、いまだ龍樹・提婆のごとく道取せず。いくばくの經師・論師等か、佛祖の道を蹉過する。

③ 大宋國むかしよりの因縁を書せんとするに、身に畫し、心に畫し、空に畫し、壁に畫することあたはず、いたづらに筆頭に畫するに、法座上に如鏡なる一輪相を圖して、いま龍樹の身現圓月相とせり。すでに數百歳の霜華も開落して、人眼の金屑をなさんとすれども、あやまるといふ人なし。あはれむべし、萬事の蹉跎たることかくのごと

きなる。もし身現圓月相は一輪相なりと會取せば、眞箇の畫餅一枚なり。弄他せん、笑也笑殺人なるべし。かなしむべし、大宋一國の在家・出家、いづれの一箇も龍樹のこつばをきかず、しらず、提婆の道を通ぜず、みざること。いはんや身現に親切ならんや。圓月にくらし、満月を虧闕せり。これ稽古のおろそかなるなり、慕古いたらざるなり。古佛・新佛、さらに眞箇の身現にあふて畫餅を賞翫することなかれ。

④ するべし、身現圓月相の相を畫せんには、法座上に身現相あるべし。揚眉瞬目、それ端直なるべし。皮肉骨髓正法眼藏、かならず兀坐すべきなり。破顔微笑つたはるべし、作佛作祖するがゆゑに。この畫いまだ月相ならざるには、形如なし、說法せず、聲色なし、用辨なきなり。もし身現をもとめば、圓月相を圖すべし。圓月相を圖せば、圓月相を圖すべし、身現圓月相なるがゆゑに。現圓月相を畫せんとき、満月相を圖すべし、満月相を現すべし。しかあるを、身現を畫せず、圓月相を畫せず、満月相を畫せず、以表を體せず、說法を圖せず、いたづらに畫餅一枚を圖す、用作什麼。これを急著眼看せん、たれか直至如今飽不飢ならん。月は圓形なり、圓は身現なり。圓を學するに、一枚錢のごとく學することなかれ、一枚餅に相似することなかれ。身相圓月身なり、形如満月形なり。一枚錢・一枚餅は、圓に學習すべし。

【本文】（当号検討分）

予雲遊のそのかみ、大宋國にいたる。嘉定十六年癸未秋のころ、はじめて阿育王山廣利禪寺にいたる。西廊壁間に、西天東地三十三祖の變相を畫せるをみる。このとき領覽なし。のちに喜慶元年乙酉夏安居のなかにかさねていたるに、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するついでに、予、知客にとふ、這箇は何麼變相。知客いはく、龍樹身現圓月相。かく道取する顔色に鼻孔なし、聲裏に語句なし。予いはく、眞箇は一枚畫餅相似。ときに知客大笑すといへども、笑裏無刀、破畫餅不得なり。すなはち知客と予と、舍利殿および六殊勝地等にいたるあひだ、數番擧揚すれども、疑著するにもおよはず。おのづから下語する僧侶も、おほく都不是なり。予いはく、堂頭にとふてみん。ときに堂頭は大光和尚なり。知客いはく、他無鼻孔、對不得如何得知。ゆゑに光老にとはず。恁麼道取すれども、桂兒も會すべからず。聞説する皮袋も道取せるなし。前後の粥飯頭、みるにあやしまず、あらためなをさず。また、畫す

ることうべからざらん法は、すべて畫せざるべし。畫すべくは端直に畫すべし。しかあるに、身現の圓月相なる、かつて畫せるなきなり。

おほよそ、佛性はいまの慮知念覺ならんと見解することさめざるによりて、有佛性の道にも、無佛性の道にも、通達の端を失せるがごとくなり、道取すべきと學習するもまれなり。しるべし、この疎怠は廢せるによりてなり。諸方の粥飯頭、すべて佛性といふ道得を、一生いはずしてやみぬるもあるなり。あるひはいふ、聽教のともがら佛性を談ず、參禪の雲衲はいふべからず。かくのごとくのやからは、眞箇是畜生なり。なにといふ魔黨の、わが佛如來の道にまじはりけがさんとするぞ。聽教といふことの佛道にあるか、參禪といふことの佛道にあるか。いまだ聽教・參禪といふこと、佛道にはなしとしるべし。

※当号検討分の資料作成担当者は菅野優子（博士後期課程三年）である（所屬・課程年次は本稿提出当時のもの）。なお本稿は、右記の資料作成者に、左記のゼミの参加者を加えて検討した共同研究である。

秋津秀彰（曹洞宗総合研究センター研究員）、横山龍顯（愛知学院大学専任講師）、藤川直子（駒澤大学禅研究所研修員）、本山水悠（修士課程二年）、松田薫・諏訪陽円（修士課程一年）、阿部伸二・玉井宏道・吉田裕・福土修成（順不同・敬称略）。また、本稿を作成するに際してのゼミは、オンラインリモート会議システムを利用して実施された。

予、雲遊のそのかみ、大宋國にいたる。嘉定十六年癸未秋のころ、はじ

めて阿育王山廣利禪寺にいたる。西廊壁間に、西天東地三十三祖の變相

を畫せるをみる。このとき領覽なし。のちに嘉慶元年乙酉夏安居のなか

にかさねていたるに、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するついでに、予、

知客にとふ、這箇是什麼變相。知客いはく、龍樹身現圓月相。かく道取

する顔色に鼻孔なし、聲裏に語句なし。予いはく、眞箇是一枚畫餅相

似。ときに知客大笑すといへども、笑裏無刀、破畫餅不得なり。すな

はち知客と予と、舍利殿および六殊勝地等にいたるあひだ、數番舉揚す

れども、疑著するにもおよばず。おのづから下語する僧侶も、おほく都

不是なり。予いはく、堂頭にとふてみん。ときに堂頭は大光和尚なり。

知客いはく、他無鼻孔、對不得、如何得知。ゆるに光老にとはず。恁麼道

取すれども、桂兄も會すべからず。聞説する皮袋も道取せるなし。前後の

粥飯頭、みるにあやします、あらためなをさず。また、畫することうべ

禪禪(乾)(正)
寺一師(玉)

廊一下、「一」アリ(懷)(瑠)
變一變(乾)(瑠)、「長」(玉)、「以下略」
喜一實(懷)(乾)(正)(龍)(瑠)、「長」(德)(實)(玉)

とふ一問(瑠)、「以下略」
箇一ケ(懷)(龍)(正)(瑠)、「以下略」
麼一戸(乾)、「以下略」

知客一ナシ(瑠)
いはく一曰(瑠)、「以下略」

圓一円(長)(玉)、「以下略」
聲一(瑠)

予と一ナシ(長)(玉)(德)
お一を(瑠)、「以下略」

等一寺(乾)
ひ一い(乾)(瑠)

舉一舉(乾)(正)

得一得(乾)、「如何得」ナシ(右)、「如得」アリ
ゑ一へ(懷)(乾)(正)(龍)、「長」(玉)
麼一戸、下、「三」アリ(龍)

また一ナシ(乾)、「又」(懷)(正)(龍)(瑠)、「長」(玉)(德)

からざらん法は、すべて畫せざるべし。畫すべくは端直に畫すべし。しか

あるに、身現の圓月相なる、かつて畫せるなきなり。

おほよそ、佛性はいまの慮知念覺ならんと見解することさめざるによ

りて、有佛性の道にも、無佛性の道にも、通達の端を失せるがごとく

なり、道取すべきと學習するもまれなり。しるべし、この疎怠は廢せる

によりてなり。諸方の粥飯頭、すべて佛性といふ道得を、一生いはず

してやみぬるもあるなり。あるひはいふ、聽教のともから佛性を談ず、

參禪の雲衲はいふべからず。かくのごとくのやからは、眞箇是畜生なり。

なにといふ魔黨の、わが佛如來の道にまじはりけがさんとするぞ。聽教

といふことの佛道にあるか、參禪といふことの佛道にあるか。いまだ聽

教・參禪といふこと、佛道にはなしとしるべし。

※懷奘書写本の書き改めナシ。

ら—ナシ(玉)

あ—ナシ(瑠)

圓—圖(玉)

せ—ナシ(玉)

覺—覺(乾)(正)

學—学(乾)(正)

は—わ(長)

廢—廢(懷)(乾)(正)(龍)(瑠)

ひ—い(懷)(乾)(正)(龍)(瑠)(長)(玉)

は—わ(瑠)

聽—聽(乾)(正)(長) 以下略

黨—黨(懷)(乾)(正)(龍)(瑠)(長)(玉)(德)

來—來(瑠)(乾)(正)(龍)(瑠)(長)

ぞ—に(瑠)

ふ—う(瑠)

い—ふ—ゆう(瑠)、以下略

【語註】

雲遊：雲が風のままに流れるごとく、諸方に参学往来すること。行脚。嘉定十六年癸未：一二二三年。和暦貞応二年。道元禪師は、この年に明全(一一八四～一二二五)と共に入宋している。瑞長本『建撕記』には、「渡宋、御歳二十四歳、建仁二代和尚同船アリ」(河村孝道『諸本対校永平開山道元禪師行状建撕記』、大修館書店、一九七五年四月、一二頁)とある。阿育王山広利禪寺：中国、浙江省東部寧波市鄞州宝幢鎮の山中に所在する。阿育王寺とも。中国宋代五山の第五位。太康二年(二八一)に、西晋の慧達(俗名劉薩可)が、阿育王の建立した舍利塔を発見したとする地を阿育王山と称すようになり、そこに所在する寺。西天東地三十三祖：摩訶迦葉から慧能までの三十三祖。西天(インド)の二十八祖と東地(中国)の六祖を合わせて三十三祖とした説。三十三祖となるのは、西天の二十八祖と、東地の初祖である菩提達磨が重複するため。変相：変相図のこと。經典に説かれる説話を図(絵画)に描いたもの(『禅学』一一一五頁)領覽：心にしつかりと明らかにすること・領得・領解(『禅学』一二九〇頁)。「覽」は「攬」に通じて、しかととらえる義(『禅語』四七七頁)。ここでの「領覽なし」とは、特に氣に留めることはなかったこと。宝慶元年乙酉：一二二五年。和暦嘉祿元年。宝慶は、南宋の理宗代の年号。知客：六頭首の一。衆僧を統理し、禪寺に来訪する客の送迎や接待を司る役職。顔色に鼻孔なし：鼻孔は鼻のこと。鼻は顔の中央にあることから、肝要なものの意に用いられる。本来の面目のこと。「仏性訳註(一)」八六頁参照。ここで「顔色に鼻孔なし」とは変相(身現円月相)の意味するものが何もわかつていない面影(様子)がなかったこと。声裏に語句なし：「声裏」は声の中の意。ここで「声裏に語句なし」とは、何も言葉がなかったという意。あるいは語った言葉に変相の意味がわかつていない様子がなかったことを言う。真箇是一枚画餅相似(真箇是、一枚の画餅に相似せり)：「真箇」は「まこと」の意。ここでは、「まことに、一枚の画餅のようですね」の意。笑裏無刀、破画餅不得(笑裏に刀無く、画餅を破すること得ず)：「こゝでは、「笑いの中に鋭いものがなく、画餅を見破る力はなかった」の意とした。「笑裏無刀」は、「笑裏有刀」(表面は温和な笑顔の中にも、実はその裏に厳格で人を殺活すること自在な利刀(機用)をもっていること)の逆の意であると思われる。真字『正法眼蔵』中卷、五十七則には、「滄山元来笑裏有刀(滄山、元来、笑裏に刀有り)」「春秋社本」五・二〇八頁、出典は『宏智広録』二、頌古八十七則(桜井秀雄・石井修道『禅籍善本古注集成宏智録』上、名著普及会、一九八四年五月、一一四頁)とある。六殊勝地：『宝慶四明志』十三には、「紹熙庚戌・癸丑両、召対重華宮、寧宗皇帝又御書孤雲及六殊勝地与仏

照庵字、賜僧道權（紹熙庚戌・癸丑の両、重華宮に召対し、寧宗皇帝、又た御書孤雲、及び六殊勝地と仏照庵の字を、僧道權に賜ふ）（『宋元地方志叢書』八、大化書局、一九八〇年一月、五二四九頁）とあり、紹熙元年（一一九〇）、紹熙三年（一一九三）の二回、重華宮に召し、寧宗より「孤雲」の御書と「六殊勝地」・「仏照庵」の字を僧道權に与えたところ（鈴木哲雄『中国禅宗寺名山名辞典』、山喜房仏書林、二〇〇六年十月、二頁参照）。ただしここでは、具体的な場所や建物等に対して名前を付したということは記されていない。中世古祥道氏は『新道元禪師伝研究』（国書刊行会、二〇〇二年五月）において、従来の「六箇所の名所」のような解釈に対して、「六つの条件を備える一地だったと解する。そして、それは阿育王山の舍利湧出といわれる地」と解釈する方が良いとしており（一〇五〜一〇七頁）、本稿では後者の説を取る。挙揚：「挙」・「揚」は、ともに「あげること」の意。仏法を宣揚して、人を導くこと。ここでは、円月相について話が挙がったこと。疑著：①相手をただ者ではないと思うこと（『禅学』一九五頁）②疑うこと。「著」は動詞の後についてその動作の完成を示す助詞。ここでは、「疑うこと」の意。知客が龍樹身現円月相の変相について何も疑っておらず、問題意識さえ持っていなかったことを言う。下語：①師家が学人のために示す語。②学人が師家に対して自己の見解を述べること。③広く著語や一転語を示すことをいう（『禅学』四頁）。ここでは、周囲にいた僧侶がそれぞれ見解を述べたが、皆な正しい見解ではなかったことをいう。都不是：全て正しくないこと。ここでは、「ほとんど全てがだめであった」とした。堂頭：禅宗で一寺の住持のこと。住職。大光和尚：阿育王寺の三十二世。生没年不詳。古来より事跡が定かでないが、佐藤秀孝氏は「笑庵了悟と晦巖大光―道元が在宋中に参学した阿育王山の太光長老をめぐる―」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第七十三号、二〇一五年三月）において、「臨済宗虎丘派の笑庵了悟（？〜一二〇三？）の法を継いだ、晦岩大光「ないし」晦巖大光という名の禅者であったことが判明し、実に天童山の密庵咸傑（中峰、一一八一〜一一八六）の法孫に当たっている」（二〇三頁）と述べている。また、『宝慶記』には「拜問。先日謁育王山長老太光之時、聊難問次、大光曰、仏祖道与教家談、水火也。天地懸隔。若同教家之所談者、永非祖師之家風。今大光道、是耶、非耶（拜問す、先日、育王山長老太光に謁したりし時、聊か難問の次で、大光曰く、「仏祖の道と教家の談と、水火なり。天地懸隔す。若し教家の所談に同ずれば、永く祖師の家風に非ず」と。今大光の道、是なりや、非なりや）」（『大久保本』三七九頁）とあり、道元禪師が阿育王山広利禪寺を訪れた時の住職が、長老太光であったことがうかがえる。他無鼻孔、对不得、如何得知：他（かれ）に鼻孔無し、对（こた）うることを得じ、如何（い

かん）が知ることを得ん。「あの人は、仏法が分かっていない、答えることもできないし、何も知っていないだろう」の意。桂兄：成桂知客のこと。「兄」は親しい先輩や友人の名などに付けて、敬意を表す語。皮袋：人間のこと。「仏性訳註（六）」六頁【語註】参照。粥飯頭：禪宗寺院の住持。住職。住持は粥飯のとき、最上位に就くことから住持のことをいう。『正法眼蔵』「行持_下」巻に、「某甲そのかみ径山に掛錫するに、光仏照そのときの粥飯頭なりき」（二五八頁）とある。また『圓悟録』十四に「由是叢林、呼長老為粥飯頭（是に由て叢林、長老を呼んで粥飯頭と為す）」（『大正蔵』四十七・七八八頁下段）とあり。端直：「仏性訳註（六）」一七頁【語註】参照。ここでは、龍樹が坐禪をしている相のことを言うか。慮知念覚：慮知は「思慮分別」、念は「觀念」、覚は「覚知」。日常の心のあらゆる働きを示す言葉。この一節は「仏性は覚知・覺了にあらざるなり」（二六頁）と同意。また「仏性訳註（二）」一〇二頁【解説】参照。疎怠：疎かにして怠けること。怠慢。聴教：教法を聴聞すること。ここでは教学の徒（文字に拘泥する依文解義の輩）のことか。反対語は「參禪」〔禪学〕八五九頁）雲衲：參禪行脚僧の事。雲水。魔黨：天魔・惡魔の仲間。仏道を妨げるものを云う（『中村仏教』二二八一頁）。

【直訳】

私は、雲遊の当時、大宋国に行つた。嘉定十六年癸未秋のころ、はじめて阿育王山広利禪寺に行つた。西廊の壁間に、西天東地三十三祖の変相が画いてあるのを見た。このときは、特に気に留めることはなかつた。のちに宝慶元年乙酉夏安居の間に再び行つたが、西蜀の成桂知客と廊下を行歩する折りに、私は、知客にたずねた、「これは何の変相図か」。知客は言つた、「龍樹の身現円月相である」。そのように言う顔つきに鼻孔がなく、声の中に言葉はなかつた。私は言つた、「まことに、一枚の画餅のようですね」。このときに知客は、大笑いしたが、笑いの中に刀のように鋭いものがなく、画餅（円月相）を見破る力はなかつた。それから知客と私は、「舍利殿」や「六殊勝地」等に行く間、何度か（龍樹の変相について）話をしたが、疑う様子もなかつた。自分から意見をのべる僧侶も、皆な正しい見解ではなかつた。私は言つた、「堂頭にたずねてみよう」。このときの堂頭は大光和尚であつた。知客が言つた、「あの人は、鼻孔がないから、答えることはできず、何も知らないだろう」。よつて大光和尚にはたずねなかつた。そのように言つていたが、成桂知客もわかつていなかった。聞いていた人も何も言うものはいなかつた。前後の住職も、見てもあやしまず、あらためな

おさなかつた。また、画くことができない法は、けつして画けないだろう。書くべきであるならば端直に書かなければならない。そうであるのに、身現が円月相であることを、かつて画いたことはないのである。

そもそも、仏性は今の慮知念覚であろうと見解することから目覚めないの、「有仏性」の言葉にも、「無仏性」の言葉にも、通達する端緒をなくしているようであり、〈仏性という言葉を〉道取しなければならぬと学習する者もまれである。しるべきである、この疎かな怠慢は、〈仏道が〉廢れているからである。諸方の住職は、全く仏性という道得を、一生言わないで終わってしまう人もいる。ある人はいう、「聴教の人たちは仏性を談ずるが、参禅の雲衲は言うべきではない」と。このように言うやからは、ほんとうに畜生である。なんという天魔、悪魔どもが、わが仏如来の道に交わり汚そうとするのか。聴教ということが仏道にあるか、参禅ということが仏道にあるか。いまだ聴教・参禅ということは、仏道にはないと知りなさい。

【現代語訳】

私は、行脚していた当時、大宋国に行った。嘉定十六年（一一二二）癸未の秋のころ、はじめて阿育王山広利禅寺に行った。本堂の西の廊下の壁にインドと中国の三十三祖が様々な姿で画かれているのを見た。このときは、特に気に留めることはなかった。そのうち、宝慶元年（一一二五）乙酉の年の夏安居の期間中に再び行ったが、四川省出身の成桂という知客と廊下を歩いて行く折りに、私は、知客に尋ねた、「これはどなたのお姿を画いたのですか」。知客は言った、「龍樹の身現円月相です」。このように言う知客の顔つきには、龍樹の身現円月相の意味するものが何もわかつている面影（様子）はなく、〈龍樹身現円月相〉という以外に、何も言葉がなかった。私は言った、「ほんとうに、円いお餅のようですね」と。そのとき知客は大声を挙げて笑ったが、龍樹の身現円月相を見破る力はないようであった。それから知客と私は、「舍利殿」や「六殊勝地」等に行く間に、何度か〈龍樹の身現円月相について〉話題になったが、疑問に思う気配もなかった。自分から意見をのべる僧侶も、皆なまともな見解ではなかった。私は「住職にたずねてみよう」と言った。このときの阿育王山の住職は大光和尚であった。知客は言った、「住職は仏法がわかつていないから、答えることはできず、何も知らないだろう」。よって大光和尚に尋ねることはしなかった。成桂はそのように（住職はわかつていないと）言っていたが、成桂自身もわかつていないようだった。この話を聞いていた人たちも何も言わなかつた。

った。阿育王山の前後の住職も、この龍樹の身現円月相をみても不思議に思わず、書きあらため直さなかった。また、画くことができないものは、けつして画けないだろう。（それでも）画かなければならないのなら、端的にそのまま（龍樹が坐禅をしている姿を）画くべきである。しかし、（龍樹の）身現（ありのままの姿）坐禅している姿がそのまま「円月相」（円相ではなく坐禅の姿）であることを、かつて画いた者はなかったのである。

そもそも、仏性というものは（私たちの）今の慮知念覚のことを言うのであろうと思ひ込んでいたので、「有仏性」という言葉にも、「無仏性」という言葉にも、正しく会得するす手掛かりを見失つてしまつていようである。言うべきであると（思つて、仏性という言葉について）学習する者もまれである。知るべきである、このように（この仏性という言葉）疎かにして（学習することを）怠つていのは、（仏法が）廃れ衰えてしまつたからである。諸方の禅院の住職の中には、まったく「仏性」という道得を一生言わないで終わつてしまう人もいるのである。ある人は次のように言う、「聴教（教学）の学者は仏性を語るが、参禅する禅者は言つてはいけない」と。このように言う者たちは、まことに畜生と同じである。なんとという天魔、悪魔どもが、わが仏如来の道にまぎれこんで、汚そうとするのか。「聴教」ということが仏道にあるのか、「参禅」ということが仏道にあるのか。いまだ「聴教」だの「参禅」だのと分けることは、仏道にはないと知るべきである。

【解説】

※本稿では、「仏性訳註（五）」・「仏性訳註（六）」の解説と今回の「仏性訳註（七）」の解説を合わせて、「龍樹身現円月相」（以下、「身現円月相」）の段全体の解説を記載する。尚、冒頭にある「身現円月相」の引用文（漢文部分）の解説は、既に「仏性訳註（五）」に記載されており、重複する部分もあるが、便宜的にこれも含めて解説した。また解説の対象となる本文は、「・「仏性訳註（五）」①」のような形で表記し、全文は本稿の最初の【本文】にまとめて掲げた。

・「仏性訳註（五）」①

この引用文に始まる「身現円月相」の段（「本山版」のおよそ八丁半に亘る部分）は、『懐契書写本』並びに『聞書抄』等の七十五卷本系諸本にはあるが、六十卷本系の「洞雲寺本」および「嘉元本」にはなく「龍樹変相可加也」とのみ記

載されている。また、六十巻本系の「瑠璃光寺本」では、この段を「仏性・下」として、奥書の後に挿入している。その理由は不明であるが、ここでは、「身現円月相」段は当初は存在せず、後に加えられたということを、奥書から推定する。それに際して、諸本の奥書を挙げると、以下の通りである。

・七十五巻本系（乾坤院本、『蒐書大成』一・一一九頁）

爾時仁治二年辛丑十月十四日、在雍州觀音導利興聖宝林寺示衆（時に仁治二年辛丑十月十四日、雍州觀音導利興聖宝林寺に在りて示衆す）。

・六十巻本系（洞雲寺本、『蒐書大成』六・三二六頁）

（最初に乾坤院本と同じ奥書を記す）

于時弘長元年辛酉夏安居日、在越州吉田郡吉祥山永平寺、以先師御草本書写之。彼本、所々散々、或書消、或書入、或被書直。仍今、校合書写也。小師比丘懷奘（時に弘長元年辛酉夏安居日、越州吉田郡吉祥山永平寺に在りて、先師の御草本を以て之を書写す。彼の本、所々散々、或いは書き消し、或いは書き入れ、或いは書き直さる。仍ち今、校合し書写するなり。小師比丘懷奘）

建治三年夏安居日、書写之。寛海（建治三年夏安居日、之を書写す。寛海）。

・懷奘書写本（仁治四年懷奘書写時、『道元禪師真蹟關係資料集』大修館書店、一九八〇年十一月、六九〇頁）

仏性 仁治二年辛丑十月十四日、記于觀音導利興聖宝林寺。同四年癸卯正月十九日、書写之。懷奘（仏性 仁治二年辛丑十月十四日、觀音導利興聖宝林寺で記す。同四年癸卯正月十九日、之を書写す。懷奘）。

・懷奘書写本（正嘉二年修正記入後）

正法眼蔵仏性第三 爾時仁治二年辛丑十月十四日、在雍州觀音導利興聖宝林寺示衆。再治御本之奥書也。正嘉二年戊午四月廿五日、以再治御本交（校）合了（正法眼蔵仏性第三 時に仁治二年辛丑十月十四日、雍州觀音導利興聖宝林寺に在りて示衆す。再治の御本の奥書なり。正嘉二年戊午四月廿五日、再治の御本を以て交合し了わる）。

懷奘書写本においては、修正記入の前後で道元禪師の奥書が異なっている。また七十五巻本・六十巻本に共通する奥書は、修正記入後の奥書と同じである。

奥書から伺える、書写の前後関係を整理してみると、

- (1) 道元禪師が仁治二年（一二四一）に「仏性」を「書」す、
 - (2) 懷奘が仁治四年に「仏性」を「記」す、
 - (3) 正嘉二年（一二五八）に「再治御本」に基づいて、仁治四年書写本に修正を記入する、
 - (4) 弘長元年（一二六一）に「先師御草本」を「校合書写」する、となる。
- (2)(3)(4)の書写原本について、少なくとも、奥書の「先師御草本」と「再治御本」という、書写原本を示す表記の相違、また本連載の校異で挙げてきた通り、七十五巻本系と六十巻本系には本文が相違する箇所があることから、(3)と(4)の書写原本は同一ではない可能性が高い。

つまり、(3)の「再治御本」は、道元禪師自身の決定稿、清書本を意味すると考えられる。これに対して(4)の「先師御草本」は、道元禪師が仁治二年に撰述した「仏性」に、加筆修正の記入を終え、奥書を書き改めた本を指すと思われる。従って、(2)と(4)の底本は同一である可能性が高い。そして「先師御草本」の修正完了後、それを清書して「再治御本」に至る過程で、さらに修正が行われたと推定される。

道元禪師は、『正法眼蔵』の書き改めの痕跡を、一部の例外を除いて、奥書等に記録を残さない。しかし、共に懷奘の奥書が記されていることで、懷奘書写本の修正記入前の本文は、仁治四年時点のものである、ということが確定される。そして(2)から、少なくとも仁治四年の時点では、「身現円月相」段が存在していた事がわかる。

但し、それが直ちに(1)の時点からこの段が存在したということを示すことにはならない。つまり、(1)の時点ではこの段は存在せず、(1)から(2)の間にこの段が著されて、別紙のような形で存し、それを追加して書写するようにとの道元禪師の指示が「龍樹変相可加也」である、ということである。そして(2)の際に、懷奘はこの指示に従い、この段を加えた形で書写を行ったのである。そして(4)の際には、修正を反映する形で書写を行いつつも、「龍樹変相可加也」の指示はあえてそのまま残すことで、撰述当初はこの段が存在しなかったという事実を残そうと考えたのではないか。

最後に、以上の推定の結論を示しておく。奥書から伺える過程を(1)から(4)で示し、その間に行われたであろうと推定されることを《》に入れて付した。

(1) 道元禪師、仁治二年に「仏性」を「書」す（懷奘書写本奥書）。

《道元禪師、この間に「身現円月相」段を著し、「龍樹変相可加也」と指示を加筆する。》

(2) 懷奘、仁治四年に「仏性」を「記」す（懷奘書写本奥書）。

《道元禪師、仁治二年書写本（先師御草本）を加筆修正し、奥書を「正法眼蔵仏性第三」、「示衆」に改める。》
《道元禪師、「先師御草本」を清書しつつ修訂する（「再治御本」）。》

(3) 懷奘、正嘉二年に「再治御本」に基づいて、仁治四年書写本に修正を記入する（懷奘書写本奥書）。

(4) 懷奘、弘長元年に「先師御草本」を「校合書写」する（六十卷本系奥書）。

(5) 寛海、建治三年（一二七七）に(4)の本を書写し、六十卷本の第三に配置する。

なお瑠璃光寺本の「仏性下」について、瑠璃光寺本は、六十卷本の後に、七十五巻本にしかない巻を補っているため、その過程の中で「龍樹変相可加也」の指示を参照して補われたと考えられ、他の六十巻本の例を見ても特異なものであることから、少なくとも道元禪師に近い時代に補われたものではないと思われる。

最後に参考として、水野弥穂子氏は、弘長二年時点において、「身現円月相」の段を紛失して書写できなかった可能性、もしくは義雲削除説を推定し、後者について、「この場合は、懷奘は、道元禪師滅後十年にして仏性巻を書写するに当って、なるべく道元禪師の書かれたもの形式を残そうとして書写したと考えるよりほかはない」と述べていることを挙げておきたい（水野弥穂子「正法眼蔵仏性巻の伝承とその本文」、『駒澤短大國文』第四号、一九七三年十二月、五〜六頁）。

また、この段落の引用文（『正法眼蔵』本文）と、これと最も類似している『景德伝燈録』巻一、龍樹章や、『天聖広燈録』巻三、龍樹章、『宗鏡録』巻九十七との比較は、「仏性訳註（五）」八〇頁【参考】『正法眼蔵』「仏性」巻所収、龍樹伝本文・他出典対照表）を参照されたい。

さて、「身現円月相」あるいは「龍樹変相」とも言われるこの話であるが、これを概説すれば次のようになる。

龍樹は、福業（善い行いをする）と幸福になることを信じていた南インドの人々に妙法（仏法）を説き、仏性があることを説いたのであるが、彼らは、福業こそが最も大切なことであり、「仏性」などといったことも見たことがないと言う。そこで尊者は、「仏性を見ようと思うなら、我慢（自己の慢心）をなくしなさい」と示す。さらに彼らは「仏性」というものは大きいのか、小さいのか、などとも質問する。それに対して龍樹は、「大きくもなく小さくもなく、広くもなく狭くもない」と言い、また福業を信じる人々に「幸福もなく（善業の）報いもなく、死もなく生もない」と示す。そして

その道理が勝れていることを知って回心した人々に龍樹が身をもって仏性を示す。すなわち、龍樹は法座に上り、ありのままに坐り（おそらく坐禪をされて）説法する。その姿は、人々には明るい満月のように見え、説法の声だけが聞こえて、龍樹の姿は見えなかった。

参集した人々の中に、長者の子である迦那提婆がいた。集まった人々に、「尊者の姿がわかるか」と尋ねる。人々は、「今は、目に見ることも、耳に聞くことも、心で認識することもできず、尊者の姿はどこにもない」と言う。提婆は、「これは、尊者が仏性の姿を現して、私達に示しているのである。どうしてそのように分かるのかというと、仏性はありのままのあらわれであり、尊者はそれを無相三昧（坐禪）によって現したのであり、無相三昧は、形が満月のようなからであり、仏性というのは、満月輪のように明らかであるのである」と説明する。そして提婆が言い終わると、尊者の満月輪のような姿は消えて、再び尊者はもとの座に現れて、「身体で円月の相を現して、それによって諸仏の身体を表した。説法には決まった形がなく、そのはたらきは認識の対象として表れるものではないのである」と語った。

そのような話である。この話について道元禪師が解説をしているのがこの段である。

ところで、龍樹と言えば、大乘仏教の「空」の教理を哲学的に究明した『中論』や、『般若経』の解説書である『大智度論』の著者として、また中観派の祖として有名であるが、本段で龍樹が「仏性」を説いていることに違和感を感じる学者もいる。龍樹は紀元二〜三世紀頃（AD150〜250頃）の人とされており、この頃のインドに「仏性」という概念（言葉）があったのか否かを含めて（釈尊滅後、舍利崇拜があり buddha dhatu は仏舍利と訳されている）、龍樹がこれを知っていたのか、若しくは知りえたかとの疑問が起る。例えば高崎直道氏は、「如来蔵思想の形成Ⅱ」（『高崎直道著作集』第五巻、春秋社、二〇〇九年十月）において、『大智度論』はインド産で、龍樹尊者の作品であることを否定すべき積極的材料もまたない。この『大智度論』には、「如来蔵」に関しては全く言及がない。（中略）龍樹尊者が「如来蔵」説を知らなかったこと、もしくは「如来蔵」説の形成が龍樹以後であること、少なくとも以前ではありえないという推定を否定する材料はない」と述べ、また「龍樹尊者の学説において「如来蔵」「仏性」という概念、若しくはそれと類似の概念たる「如来種姓」等について特別の顧慮が払われた形跡はない」としている。また、「仏性」と深く関わる「如来蔵」を説く『如来蔵経』についても、龍樹よりあと（三世紀後半以降）と推定する学者もいる（早島鏡正監修『仏教・インド思想辞典』、春秋社、二〇一三年四月）ことを付記しておきたい。

・「仏性」(五)②

道元禪師は、まず「身現円月相」の話の末尾にある、龍樹の偈を拈提して「真箇の用弁は声色の即現にあらず。真箇の説法は無其形なり」と示している。現代語訳では、「真箇の用弁」の「用弁」の意を「はたらき」と解釈（「仏性」(五)）八三頁【語註】したが、龍樹のような本物（本当）の仏祖のはたらきや説法、仏性の表現などは、姿には現れず、形があるものではないとし、「身現円月相」の話は、その一端を示した話であるとするのである。

また、ここに見られる「汝欲見仏性、先須除我慢」（汝、仏性を見ようと思うなら、先ず必ず我慢を除きなさい）の語は重要であると考えられる。道元禪師はこの語を拈提して、「見」はないわけではなく、その「見」とは「除我慢」（我慢を除くこと）であるとする。多種多様な「我」や「慢」を「除く」ことが「見仏性」（仏性を見ること）であり、「見仏性」と「除我慢」とは同じであると学ぶべきであると説き、この説示の根本的な意味を、よく考えなければならぬとする。ところで『正法眼蔵随聞記』卷二の二には、「一日示云、人、其の家に生れ、其道に入らば、先づ其の家の業を修べし、知べき也。我が道に非ず、自が分に非ざらんことを知り修するは、即非也。今出家の人として、即仏家に入り、僧道に入らば、須く其業を習べし。其儀を守ると云ふは、我執を捨て、知識の教に随ふ也。其大意は、貪欲無也。貪欲無らんと思はば、先須離吾我也。吾我を離るるには、観無常是れ第一の用心也。（中略）禅僧の能く成る第一の用心は、祇管打坐すべき也。利鈍賢愚を論ぜず、坐禅すれば自然に好くなるなり。」（『大久保本』四三〇頁、カタカナをひらがなに改める）とある。出家者の学道の用心を示した重要な説示と考えられるが、ここでは「我執を捨てること」「知識の教えに随うこと」「貪欲なきこと」「吾我を離れること」「無常を観ずること」「只管打坐すべきこと」等が説かれている。無常を観じ、吾我を離れ、貪欲から離れ、我執を捨てて知識の教えにしたがい、祇管打坐すべきことが、やや段階的に示されている。「我執を捨て」「吾我を離るる」ことは「除我慢」と同意であるが、龍樹は「除我慢」の行である坐禅（祇管打坐）を行じて「仏性」を見せたということになる。「見」は「現」と同意であることからすれば仏性を見せた」というよりも「現した」と言ってもよいはずである。

尚、道元禪師は「見仏性」について「眼見目観に習ふべし」と示しているが、この語の解釈（「仏性」(五)）八三頁【語註】参照）について本稿では、「眼見」と「目観」とが「同物」「同事」「不二」であることを言った語であると捉え、「見仏性」（仏性を見ること）と「除我慢」（我慢を除くこと）が同一であることを示した語と解釈した。但し、他の解釈と

して「眼見目観にならふべし」を、仏性を見るということは「眼（目）で見（観）たものに習いなさい」とする訳も可能であり、その場合、除我慢の者が見れば目に見えるままが仏性であるという解釈となろうか。

この段落にある、「愚者おもはく、尊者かりに化身を現ぜるを円月相といふとおもふは、仏道を相承せざる儼類の邪念なり。いづれのところのいづれるときか、非身の他現ならん。まさにしるべし、このとき尊者は高座せるのみなり。身現の儀は、いまのたれ人も坐せるがごとくありしなり。この身、これ円月相現なり。身現は方円にあらず、有無にあらず、隠顕にあらず、八万四千蘊にあらず、ただ身現なり」という説示は、龍樹の「身現円月相」に対する解釈を示した中で重要な部分と思われる。道元禪師は、龍樹は化身として円月の相を現したのではなく、ただ高座に坐っていたのであるとする。それも他の誰もが坐っているように坐っていたのであり、その坐っているすがたを「円月相」の現れであるとする。「非身の他現」つまり、身（身体）でないものが他の相（円月のような相）に変化（へんげ）したのではないとしており、「ただ身現」であったとする。これが道元禪師の解釈である。これは、この話に対する通常の解釈（龍樹が姿をかえて化身を現したとする解釈）を批判して、きわめて常識的な（神秘的ではない）解釈をしている。これは、道元禪師の「神通」や「百丈野狐」の話に対する解釈等と同様であり、一貫した立場であるとも言える。

・「仏性訳註（五）」③

ここで、円月相というのは「這裏は甚麼处在、説細説僂月」であるという。丸いとか粗いとか形にとらわれてはならない月であるとする。この語は、『正法眼蔵』「行持」に、「黄檗いはく、遮裏は什麼所在、更説什麼僂細（這裏是れ什麼の所在にしてか、更に什麼の僂細をか説く）（二三八頁）とある。『臨濟録』では、「師云、太僂生。普化云、遮裏は什麼所在、説僂説細（師云く、太僂生。普化云く、這裏是れ什麼の所在にしてか、僂と説き細と説く）」とある。「円月相」といえば、その円さに何か特別な意味があるように捉えられがちであるが、形に執られるべきではないことを示していると思われる。（「仏性訳註（五）」八九頁【語註】参照）。また、「この身現は先須除我慢なるがゆえに龍樹にあらず、諸仏体なり」というのは、龍樹が円月相（仏性）を身に現したのは、除我慢を（坐禅によって）現したのであり、諸仏はみな（坐禅による）除我慢によって仏性を現すので、龍樹のみではないことをいう。坐禅の時、おのずと我慢は除かれている。そこに仏性が現れるのである。その、仏性が現れている坐禅の姿を「円月相」と言うのである。この中

に「以表」（いひよう）あるいは「形如」（ぎようによ）という語が見られる。「以表」とは原文では「くを以てくを表す」（ここでは、身に円月相を現ずることによって、諸仏の体を表す）という意であるが、道元禪師はこれを一つの熟語としている。これは「身現円月相」と「諸仏体」が二見對待の關係ではなく、絶対的に同一であることを示した端的な表現であると思われる。「形如」も原文では「形くの如し」（ここでは、形が満月のようなものである）という意であり、これも無相三昧（坐禪）は、その形が満月のようなことを示したものであるが、道元禪師はこれも一つの熟語として「形如」（この画いまだ月相ならざるには形如なし）の用例参照）とし、無相三昧（坐禪）と満月が二見對待の關係ではなく、絶対的に同一であることを端的に示したものであろう。「無其形さらに無相三昧なるとき、身現なり」という説示にも注目したい。仏（仏の説法）には定相がなく、本来定まった形がないとするのが仏教の基本的な立場であり、それをここで「無其形」と言っていると思われるが、その本来は定まった形のない仏（仏の説法）が、その道理の上で、龍樹が無相三昧（坐禪）を行じたとき、本来「無其形」である仏性が坐禪の相（身）となって現れたということであらう。それを道元禪師は「円月相」というのである。

・「仏性訳註（六）」①

道元禪師は、迦那提婆が、龍樹尊者の「身現」を指して「仏性相」を現したものであると言ったことを讃えている。そこには余者（他の学者）は仏性は「眼見・耳聞・心識等にあらざ」（眼で見ることも、耳で聞くことも、心で認識したりすることも出来ない）とのみ言っているのに対して、迦那提婆が、仏性が龍樹の「身現」として現れていることを言い得たことを讃えたものである。ここで迦那提婆を讃えるのもやはり、仏性が内在するものではなく、また大衆が見たり聞いたたり認識したりすることが出来ない奇特なものではなく、誰もが見たり認識したりできる坐禪（無相三昧）の行に現れるものであることを、迦那提婆の言葉を讃えることによって示したものであるか。また「仏性之義、廓然虚明なり」という迦那提婆の言葉も、仏性は「坐禪」というあたりまえの相として現れることを示したものと道元禪師は捉えていると受け取られよう。とすれば「無相三昧、形如満月」はやはり「無相三昧は形満月の如し」（無相三昧の形は満月のようなものである）と言うのではなく、「無相三昧」（坐禪）のことを「満月」（円月）と言ったと解釈すべきであらう。ここにまた、先の「形如」という熟語、すなわち「形くの如し」という意味合いを嫌った用例が注目されるのである。

・「仏性訳註（六）」②

ここでも、繰り返し「身現」が仏性を説いていることは明らかであるとしている。更に言えば、「身現」（祇管打坐の相〓無相三昧）がそのまま「仏性」であり、「諸仏体」が「仏性」であると言うのであろう。この仏性について、龍樹・提婆の後、学人はこの仏性を龍樹や提婆のように説いていないとし、仏性を誤って理解していると批判する。

・「仏性訳註（六）」③

大宋国では昔からこの因縁（龍樹が身に円月相を現した故事）を書き表そうとするのに、一つの輪を画いて、「龍樹の身現円月相」としていることを批判している。「身に画し、心に画し、空に画し、壁に画する」という説示の解釈は難しいが、「訳註（六）」の語注で述べたように、「身に画し」の身とは「正身端坐」の身、「心に画し」の心とは「三界唯心」の心、「空に画し」の空とは「色即是空」の空、「壁に画し」の壁とは「牆壁瓦礫」の壁と解釈し、いずれも全世界、あるいは全世界のあらゆる存在を「仏性」とするものと捉えた。ところで「真箇の画餅一枚なり」という説示の「真箇の画餅」とは、通常言うところの「絵に書いた餅」のことであり、『正法眼蔵』「画餅」において「画餅にあらざれば充飢の菓なし、画餅にあらざれば人に相逢せず、画充にあらざれば力量あらざるなり」（二二四頁）と説示する画餅とは異なっている。同じ語であっても、道元禪師においてこのような使い分けがあることが知られる。また、「人眼の金屑をなさんとすれども、あやまるといふ人なし」の「金屑」（金の粉）とは「身現円月相」なる勝れた故事を指すと解釈したが、金の粉でも人間の眼に入れば害となるように、龍樹の素晴らしい活作略を後代の学人が誤って解釈しており、それを誤っていると言う人がいないことを道元禪師が憂えているのである。

・「仏性訳註（六）」④

道元禪師は、「身現円月相」を画くには、仏祖が坐禅によって仏となり祖となって伝わって来たのだから、法座の上の龍樹の身現（坐禅した姿）を「円月相」の図にするべきであると説き、「身現相」（現実の身体そのままの姿）を画くべきであると言う。そして龍樹の「円月相」を描こうとするときには、「満月相」を図にするべきであり、「説法」を図にせず、円い餅と思つてはならないとする。龍樹が坐禅した身体の姿がそのまま円月の身体であり、その姿形が満月の

形なのであるから、一枚の錢や餅として描いたとしても、それを「円」（龍樹が坐禅した姿）として学ぶべきであると説示するのである。

・「仏性証註（七）」

道元禪師は入宋中、何度か阿育王山広利禪寺を訪れている。初めて訪れたのは嘉定十六年（一一二二）癸未の秋である。そのとき西廊の壁に龍樹の変相（身現円月相）が描かれているのを見る。おそらく他の仏祖については肖像が描かれていたのに対し、第十四祖の龍樹のそれは、ただ円相が描かれていたのではないかと推測される。道元禪師はそのときこの龍樹の変相を見て、気に留めることはなかったが、宝慶元年の夏安居の時に再び阿育王山を訪れたときに、この廊下を成桂知客と歩いていた時、この変相が目にとまり、「這箇是什麼変相」（これは何の変相図ですか）と知客に問いかける。知客は「龍樹の身現円月相だ」と答えるのみで、そう答えた知客の顔つきには、龍樹の身現円月相の意味するものが何もわかつていない様子がなく、それ以外に何の言葉もなかった。そこで道元禪師はさらに「真箇是一枚画餅相似」（まことに一枚の餅の絵のようですね）と話を振るが、知客はただ大声で笑うだけであった。それから知客と道元禪師は、「舍利殿」や「六殊勝地」等に行く間、龍樹の変相について何度か話題になったが、龍樹が円相で描かれていることについて知客は疑問をもつ様子でもなく、何もわかつていないようであった。また一緒にいた僧侶たちもそれぞれ意見をのべたが、まともなことを言う者は一人もなかったのである。そこで道元禪師は「堂頭和尚にたずねてみよう」と提案するが、知客が「堂頭は仏法がわかっているから、答えることはできず、何も知らないだろう」と言い、堂頭に尋ねることとはしなかった。知客は、堂頭はわかっていると言わない、知客自身もわかっていると言わないのであったのである。

道元禪師は、阿育王山でのこの話を紹介して、龍樹の身現円月相の変相について、ほんとうにわかっている者はいないことを嘆き、結局は仏性についても、わかっている者は誰もいないと憂えているのである。

ところで、「前後の粥飯頭、みるにあやしまず、あらためなをさす。また、画することうべからざらん法は、すべて画せざるべし」という説示であるが、阿育王山の（当時の現住とその）前後の住職も、龍樹の身現円月相の変相を見ても不思議に思わず、書き改めることをしなかったと批判し、また描き改めようにも（仏性のことがわかっていなかったので）描き改めることができなかったのであろうという意であると解釈し、続く「画すべくは、端直に画すべし」は

「それでも」画かなければならないのならば、端的にそのまま（龍樹が坐禅をしている姿を）画くべきである」と解釈した。この部分について水野弥穂子氏は「絵にかくことのできないものならば全くかかないのがいい」（『岩波文庫本』一〇五頁脚注）と注記しており、そのように解釈することもできる。いずれにしても、仏性は本来形に描けないものであるが、描かなくてはならないとすれば、あえて円相ではなく端的に坐禅の姿を描くべきであるとする道元禪師の説示であろう。この身現円月相の段のポイントは、この点にあると言えるのである。この段の末尾の「諸方の粥飯頭、すべて仏性といふ道得を、一生いはずしてやみぬるもあるなり。あるひはいふ、聴教のともがら仏性を談ず、参禅の雲衲はいふべからず。かくのごとくのやからは、真箇是畜生なり。なにといふ魔黨の、わが仏如来の道にまじはりけがさんとするぞ。聴教といふことの仏道にあるか、参禅といふことの仏道にあるか。いまだ聴教・参禅といふこと、仏道にはなしとしるべし」という説示には、仏性について語ることなく、会得していない者に対する道元禪師の厳しい批判がうかがわれる。「仏道には聴教も参禅もない」という言葉は重要であろう。そもそも仏道においては聴教（教学）の学者と参禅の禅僧といった区別をすべきではなく、禅僧は「仏性」という語に限らず「仏法を語ってはいけない」というのは誤りであり、参禅の禅僧も、仏法について談じ、学び、きちんと会得しなければならず、その上で参禅（実践）することの大切さを示したものと思われる。

〈キーワード〉道元、懐奘、『正法眼蔵』、「仏性」巻、訳註、校異